写真でみる

源氏物語

写真でみる
源氏物語

朝日新聞社編

写真でみる源氏物語

昭和三十五年三月十五日　第一刷発行

定価 六百円

編集　朝日新聞社
発行　李家正文
印刷　大日本印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
東京都有楽町・大阪市中之島
小倉市砂津・名古屋市広小路

© 朝日新聞社　1960年

目次

口絵　源氏物語絵巻（黎明会蔵）　原色版四葉

図版　グラビア写真

紫式部……1
写真でみる源氏物語……2
平安京……4
紫宸殿……6
清涼殿……8
絵巻にあらわれた主要人物……10
桐壷……12
帚木・空蟬……14
夕顔（一）……16
夕顔（二）……18
若紫……20
紅葉賀・花宴……22
葵……24
賢木・花散里……26
須磨・明石……28
澪標……30
末摘花・蓬生……32
関屋……34
絵合・松風……36
薄雲・朝顔・乙女……38
玉鬘・初音……40
胡蝶・蛍・常夏・篝火……42
野分・行幸・藤袴・真木柱……44
梅ケ枝・藤裏葉・若菜（上・下）……46
柏木・横笛……48
鈴虫……50
夕霧・御法・幻・匂宮……52
紅梅・竹河……53
橋姫……54
椎本……56
総角・早蕨……58
宿木……60
東屋……62
浮舟……64
蜻蛉・手習……66
夢浮橋……68
紫式部の遺跡と伝説……70
源氏物語の伝本と古写本……72
源氏物語に関係のある絵画……74
源氏物語の関係文書……77
源氏物語関係の家具と調度品類……78

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説

源氏物語総説……文学博士　池田亀鑑……83
源氏物語の現代的意義……83
作者について……84
紫式部の略歴……85
紫式部の作家的生活……86
物語の名称……87
巻冊数について……88
巻名と巻序……90
並びの巻について……91
物語の構想と各巻の配列……92
各巻の孤立性と連関性……94
短編性と長編性……95
物語の主題……96
執筆動機について……98
執筆期間……98
巻々の成立順位……100
写実的精神と手法……101
浪漫的精神と手法……102
モデル論……104
もののあわれと時代的環境……104
後代文学への影響……106
諸本とその系統……107
主要なる研究書……108
五十四帖の梗概……111
源氏物語絵巻について……東京国立文化財研究所長　田中一松……120
源氏物語の劇化について……124
源氏物語映画演劇上演年表……昭和女子大学日本文学研究室……125

装本・題字　町春草

源氏物語の作者　紫式部画像　土佐光起筆　石山寺蔵

紫式部

花やかな平安文化の京の都で、文学に名も高い家に生まれた美しい一本の草花――

御所に近い賀茂川の堤にそった藤原為時の邸に紫式部は生まれた。父の為時は、藤原鎌足の血が流れている和歌や学問にすぐれた人であった。紫式部は、はじめ藤式部といって、小さいときからセンダンの木のようにかんばしく、物ごとに明かるくさといひと。兄の惟規の修める史記をそばから読むほどであった。音楽にすぐれ十三絃の箏の琴の名手で中宮を感心させたり、仏教、歌合わせ、香合わせ、蹴鞠なども学んだ。

十九歳の秋、父に伴なわれて越前にくだった。雪にあけくれてさびしく、ただ都を恋うていた。一年たって京に帰り、二十一歳の春、長徳四年、才色兼備のかの女は蔵人の藤原宣孝と結婚した。ある日、夫は九州に勅使としてくだったが、まもなく女の子賢子を産んだ。そのよろこびもつかのまで、あくる年の春の花が散るころ、宣孝は急死して未亡人となった。式部の手にはなにごとも知らない幼な子がほほえんでいた。

秋になって父は六年ぶりに都へ帰った。それから六年、三十歳のとき中宮のもとに宮仕えして紫式部とよばれた。この宮仕えのことは、かの女の日記にくわしい。

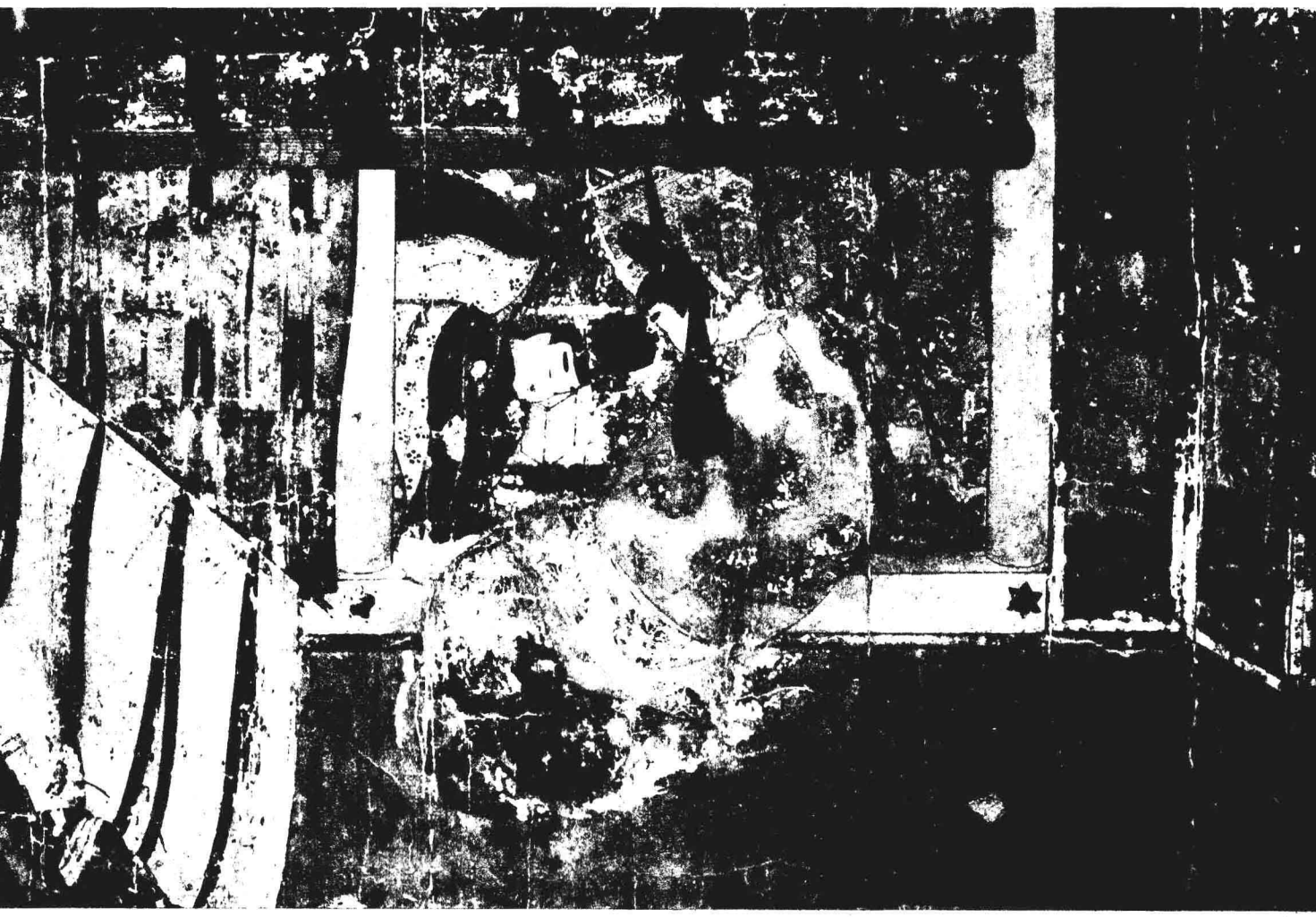
ところで、また父は、越後の国守となって行き、兄も後を追ったまま死んでしまった。式部はこのころ、源氏物語五十四帖を書いたといわれる。長和五年、年老いた父と十六歳のまなむすめを残して三十九歳のはかない一生を閉じた。

写真でみる源氏物語

源氏物語は、日本が世界にほこる一大長編恋愛小説である。この物語が書かれた十世紀から十一世紀にかけては、まだ世界は神話や童話の境をさまよっていた。その時代に、東洋の一角で、このような近代的性格を持った文学が生まれたことは驚くことである。

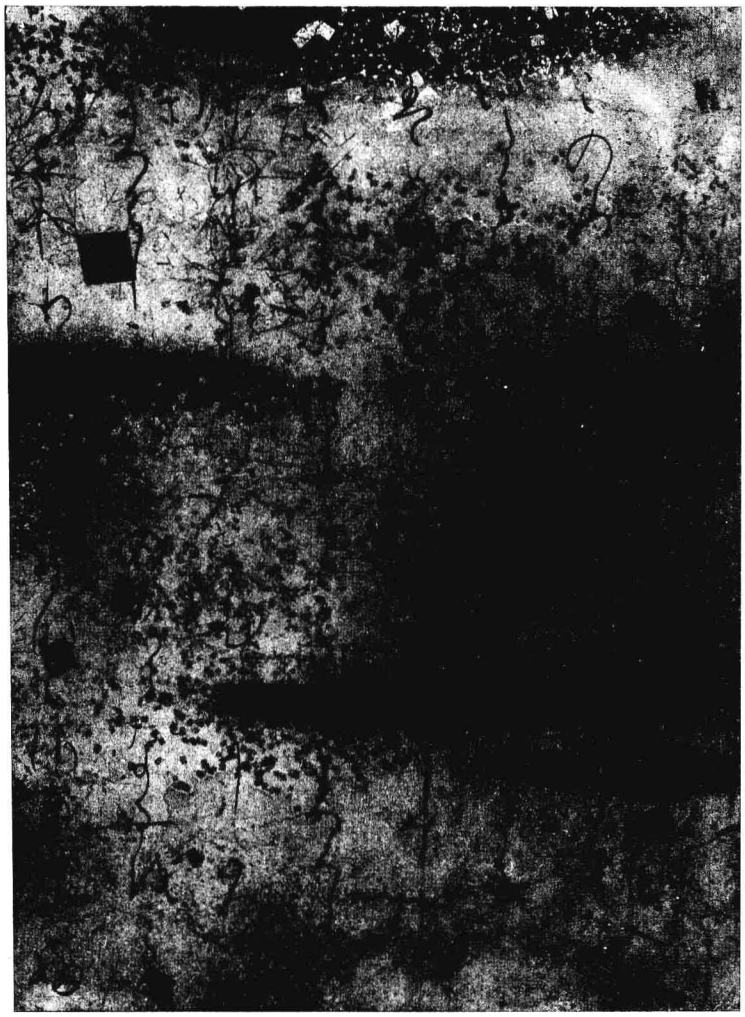
源氏物語は、一代の貴公子、光源氏と、その子薫の君を主人公として、多くの女性を配し、「桐壺」から「夢浮橋」の巻まで五十四帖の大ロマンスを展開している。

この書は、物語の叙述にしたがって、国宝「源氏物語絵巻」をはじめ、歌舞伎、能の舞台、平安京ゆかりの京都の風景など、美しい写真によって、構成編集し、王朝文学の花といわれる古典「源氏物語」を多彩に描いてみた。



柏木は源氏の妻である女三の宮を懐妊させ薫を生む　柏木は罪の恐ろしさに悩み病床にあると　そこへ従弟の夕霧が見舞いにきた

源氏物語絵巻　竹河（二段）黎明会蔵　玉鬘の姫君たちが桜の花の咲く庭に面して碁をうっている　蔵人の少将がそれをのぞいている



源氏物語絵巻　横笛の詞書　黎明会蔵

源氏物語絵巻　柏木（二段）　黎明会蔵

空から見た京都御所全景　むかしの平安京の内裏の位置より東にある　写真中央下の回廊をめぐらした建物が紫宸殿　その上左が清涼殿

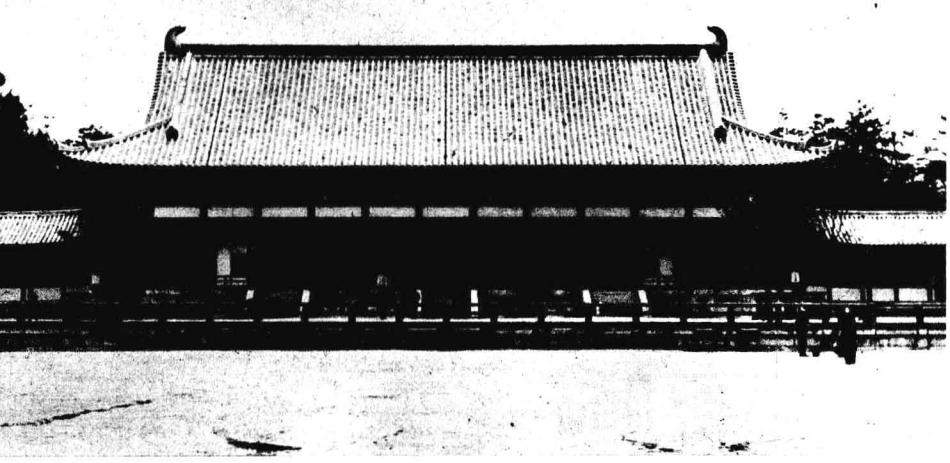
平安京

源氏物語の舞台になっている都は平安京である。平安京は、桓武天皇の時、延暦十二年（七九三年）に山背国葛野郡宇太の地、つまり、いまの京都に造営された。

この都は、唐の長安の都や、奈良の平城京にならって造られたもので、東西一五〇八丈（およそ四・六キロ）南北一七五三丈（およそ五・三キロ）の長方形で、中央を南北に走る朱雀大路によって東が左京、西が右京にわけられた。

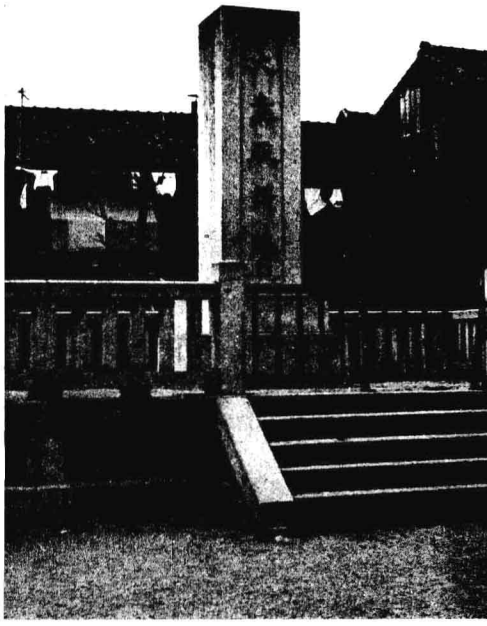
東西に通う大路を九条に、南北に通じる大路によって四坊にわけられた。大内裏は、朱雀大路の北にあって、内裏と官庁があり、南の端には羅城門があった。

清水寺の全景　清水の舞台で知られた平安時代の観音信仰の霊場



桓武天皇の平安京奠都を追慕し大極殿を模して建てられた平安神宮

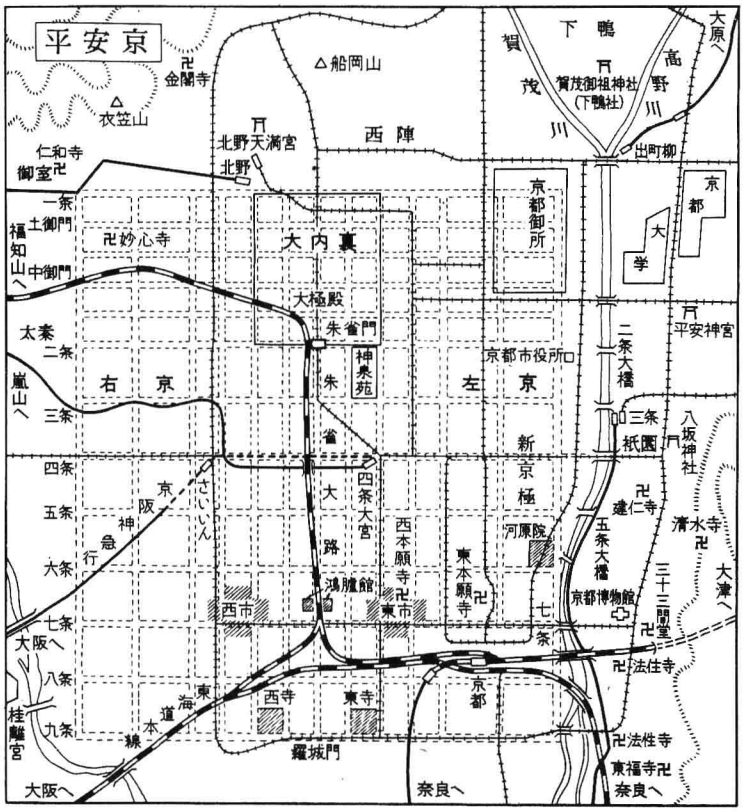
平安京大極殿の跡



東寺の塔　羅城門の東西に建てられた寺の一つ

神泉苑（御池）　平安京大内裏東南の禁苑

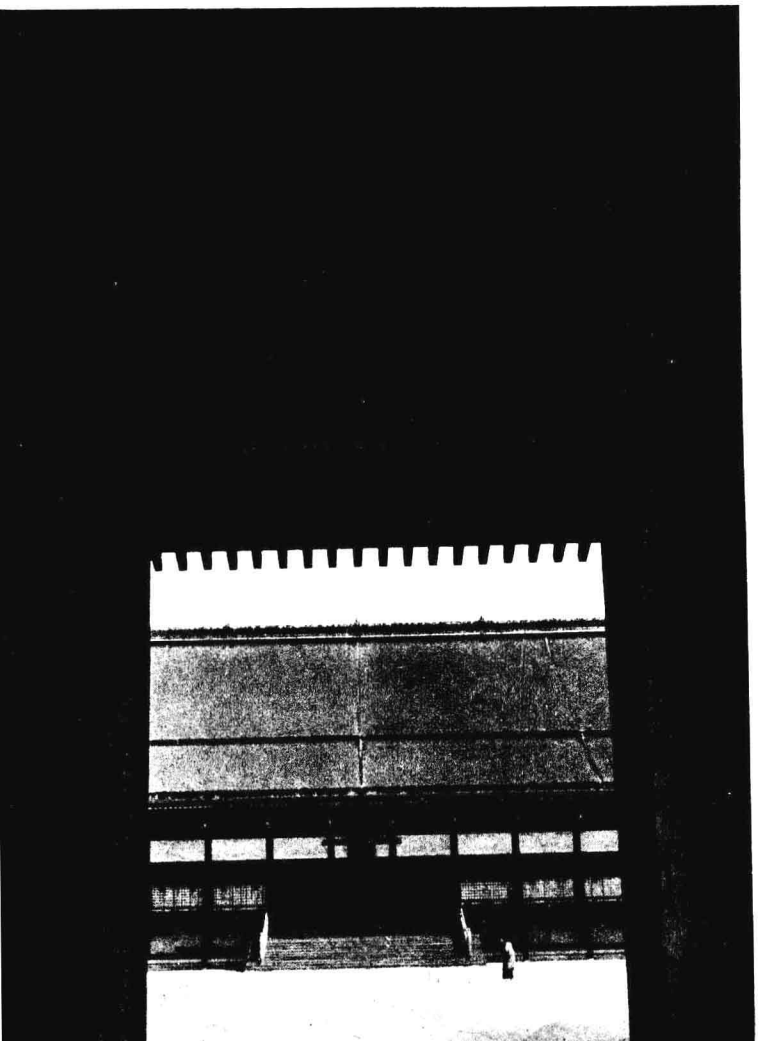
羅城門跡　朱雀大路の南端に建てられた正門



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

紫宸殿の正面　右に左近の桜　左に右近の橘　広壮な入り母屋はいかにも宮殿らしい

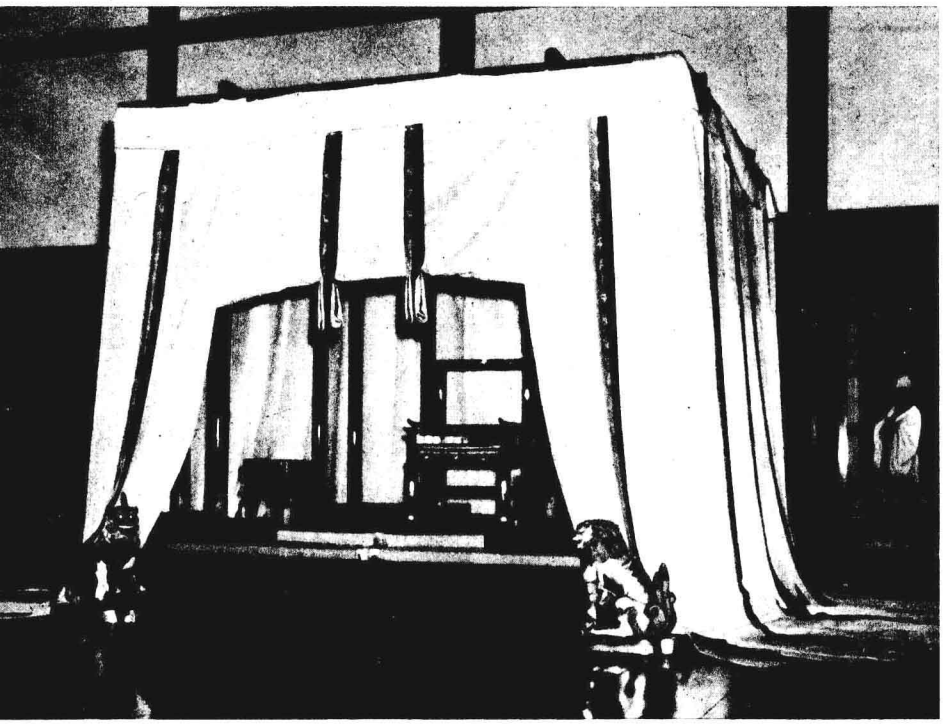
承明門から南庭の白砂をへだてて紫宸殿をのぞむ

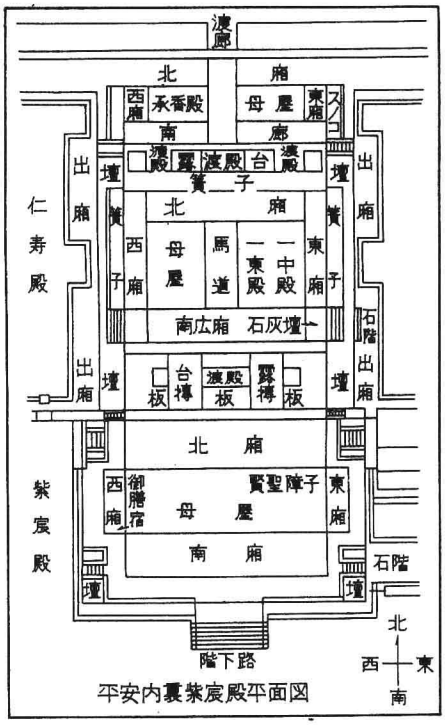


美しい左近の桜の花かげに紫宸殿の額が見える

紫宸殿の内部　建てものの中央のはり間を母屋（もや）　その四方のわきのはり間を廂（ひさし）

母屋の中央に御帳台（みちょうだい）という玉座がある





平安内裏紫宸殿平面図

紫宸殿（しいでん）

源氏物語は、主として宮廷を中心に物語が進められる。その宮廷のあった大内裏は、平安京の中央北部で、内裏のほか、多くの官庁をふくむ広大な地域であった。

紫宸殿は、宮廷の正殿で、入り母屋、桧皮ぶき、寝殿造りの荘重な建てもので、最も重要な儀式がおこなわれた。正面に十八段階を設け、向かって右に左近の桜、左に右近の橘がある。

白砂のかがやく南庭をかこんで、丹（に）塗りの回廊がめぐらされ、西側に月華門、正面に承明門、東側に日華門がある。

いまの京都御所は、藤原邦綱の邸宅に造られた東洞院土御門殿で、正式に皇居になったのは、いまから五百六十余年前、後小松天皇のときである。その後、戦乱のため数度炎上したが、再建されている。現在の御所は、安政二年に平安の古制によって復興されたものである。

清涼殿

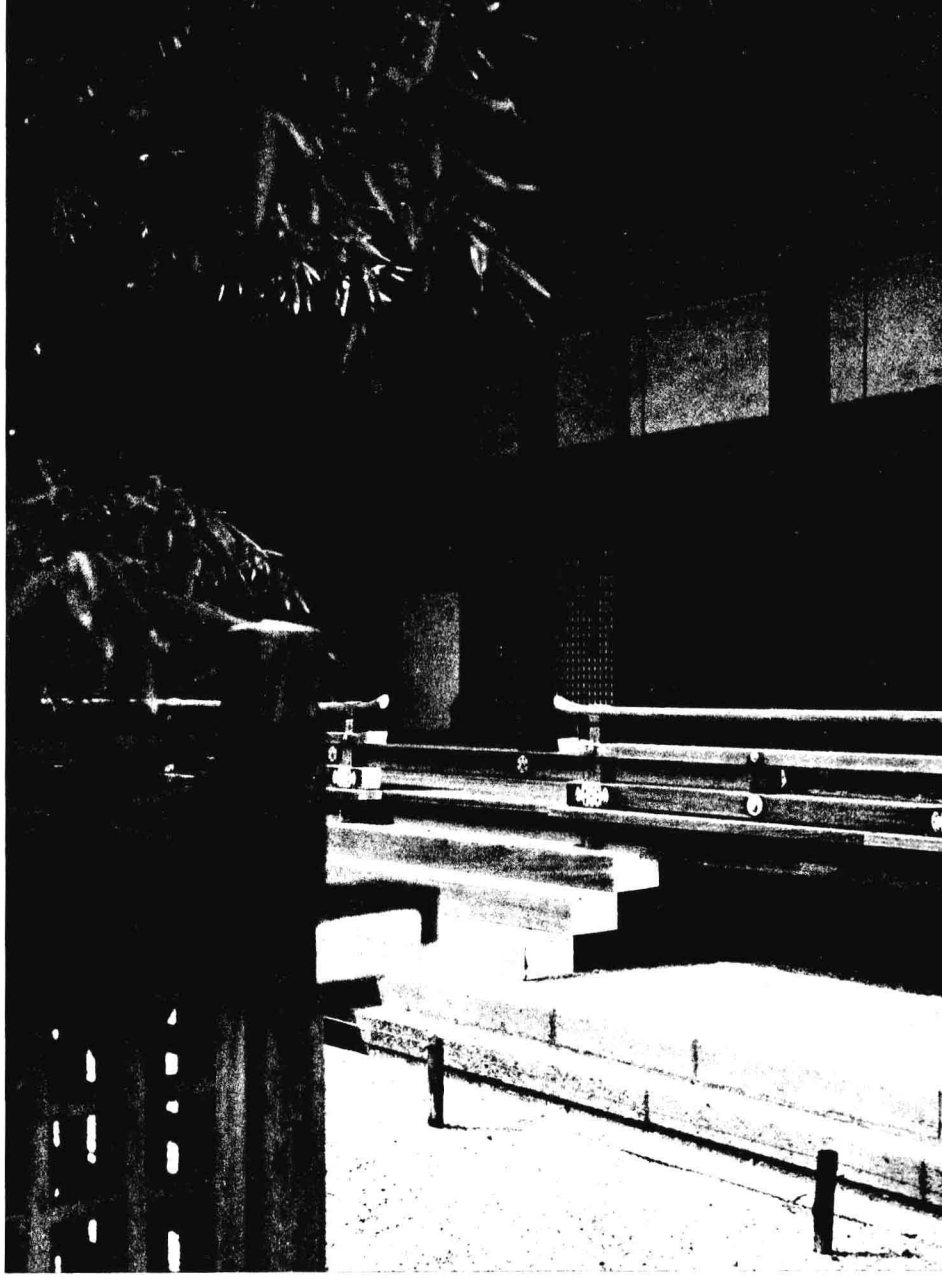
清涼殿は、紫宸殿の北裏につづく御殿で天皇の日常の御座所であった。

平安時代の寝殿造りの典型的な住宅建築で、入り母屋、桧皮ぶき、中央に母屋、四方に廂、外部に簀子をめぐらしている。紫宸殿にくらべ、典雅な建物である。

源氏が十二歳、元服の式がとりおこなわれたのは、清涼殿の東の廂であると書かれているが、桐壺の巻をはじめ、清涼殿が源氏物語の多くの場面に、とり入れられ、主要な舞台となっている。

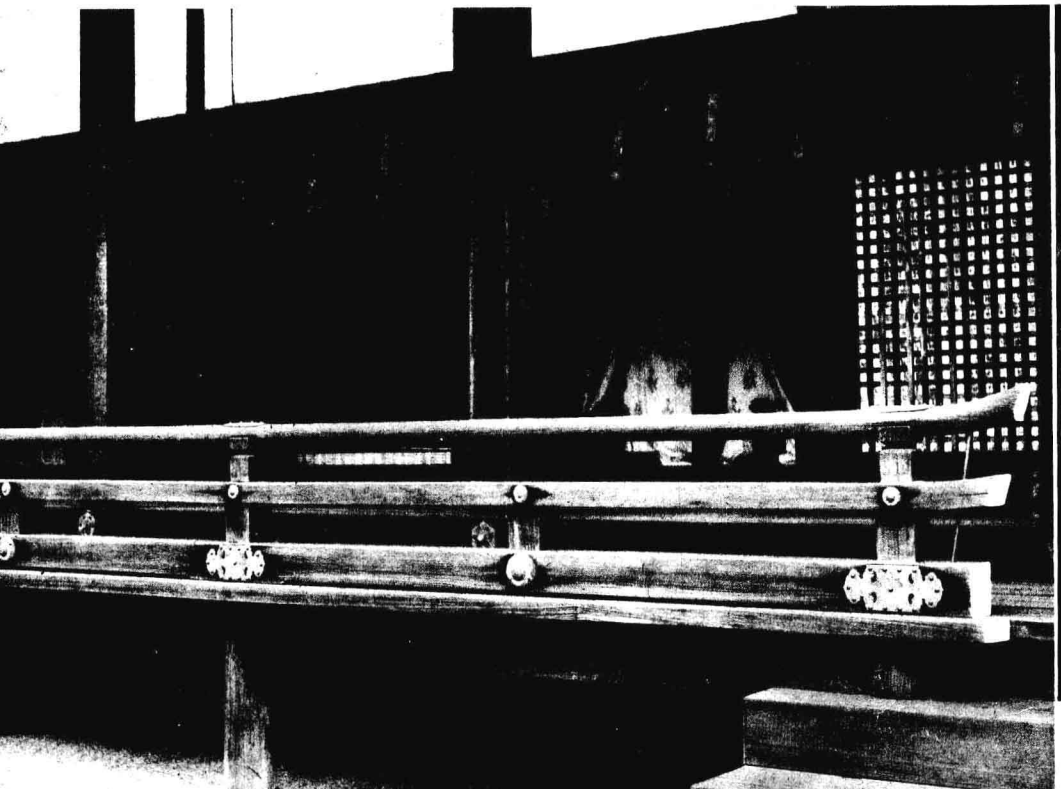
母屋には御帳台、東廂には昼御座があり、儀式のときに、天皇がここに出御される。御帳台の北に夜御殿があり、天皇の御寝所であった。

御殿の前の白砂の庭を東庭といい、向かって左に漢竹、右に呉竹がある。軒下に石の溝があり、水が北から南へ流れている。これを御溝水といい、北隅が滝口で、滝口の武士が警固したところである。

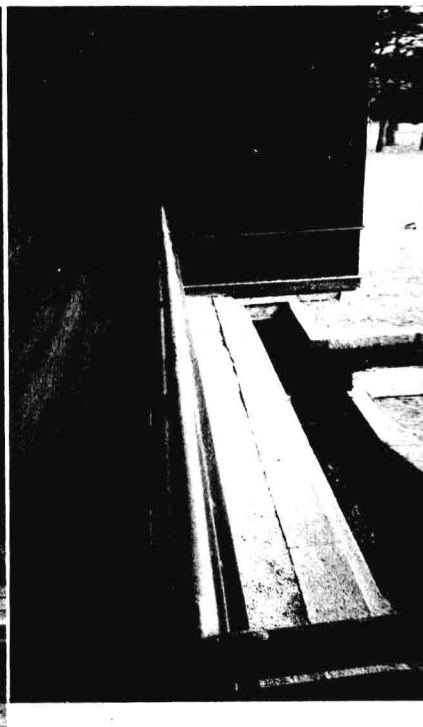


呉竹から見た清涼殿の東面

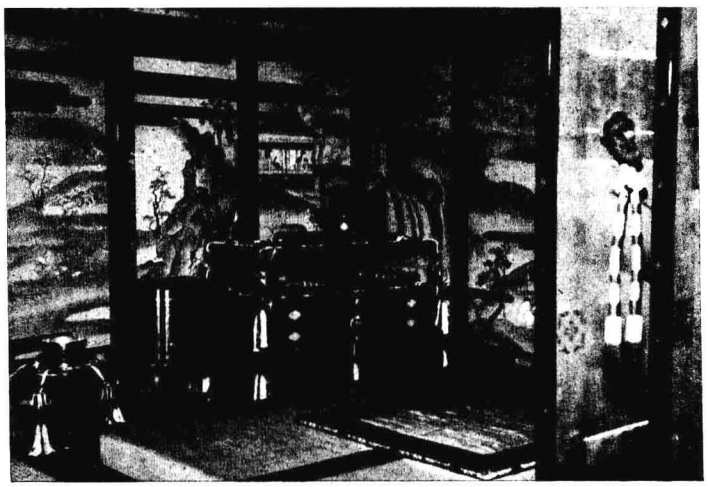
東廂からのぞんだ昼御座と御帳台



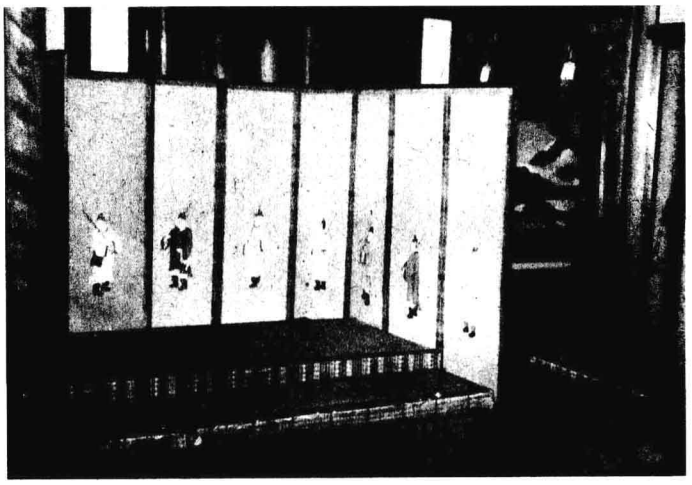
武士が警固した滝口



清涼殿の全景　右に呉竹　左に漢竹

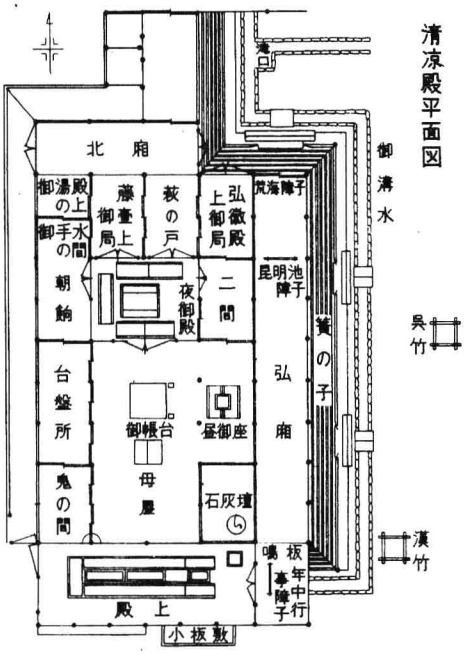


朝食をとられたり　衣がえをされる朝餉の間

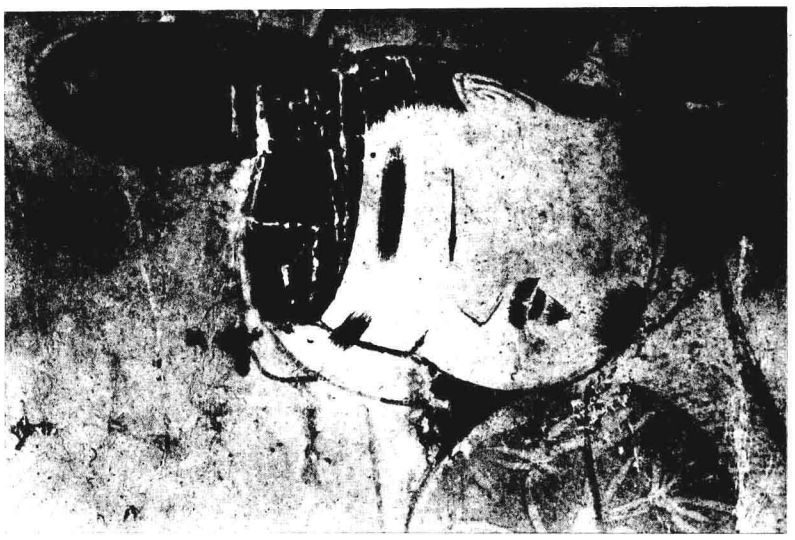


天皇の夜御殿の寝台

昔の内裏の五舎の一つで　飛香舎（ひぎょうしゃ）または藤壺ともいう　皇后の御殿



絵巻にあらわれた主要人物



源氏　薫を抱いて感無量の表情（柏木）

紫上　源氏の妻で兵部卿宮の女（御法）

源氏物語五十四帖のなかには、主人公、源氏を中心に、多数の人物が登場する。

この小説には宮廷を主とした豪華けんらんたる平安朝の貴族たちが、あやをなして織りこまれている。物語の表面に出てくる主要人物だけでも六十数人の多数に達している。

源氏物語絵巻（黎明会蔵ならびに益田家旧蔵）には、これら主要人物が、貴族的な物語絵の美しさをもって、みごとに描き出されている。目は細い線でひき、鼻は小さいカギ型に描く単純な手法によって、人物の性格や表情が巧みに表現されている。

源氏の忠臣惟光（これみつ）（蓬生）

末摘花またはその侍女といわれる（蓬生）

朱雀院　帝の女三の宮は源氏の妻（柏木）

宇治の大君　薫が見そめる（橋姫）

宇治の中君　匂宮の子を生む（宿木）

浮舟　薫の女だが匂宮が横どりする（東屋）

匂宮　琵琶をひく（宿木）

薫君　八の宮の姫君をのぞく（橋姫）

笛吹く公達（きんだち）（鈴虫）

雲井雁　乳を与える（横笛）

夕霧　源氏の子で雲井雁の夫（夕霧）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com